様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４５３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１２２７６

研究課題名（和文）終末期における心理的苦痛の緩和ケア評価プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of ' Palliative care evaluation program' for psychological distress of end of life patients

研究代表者
下舞　紀美代（SHIMOMAI, KIMIYO）

関西看護医療大学・看護学部・教授

研究者番号：８０４５８１１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：2018年は、がん患者の死亡直前の心理について国際学会TNMC＆WANSで発表した。2019年は、研究交流会で「終末期がん患者の身体的・心理的苦痛の訴えの内容とその時期」を発表した。2020年は、死亡前16日の心理について論文投稿した。書籍は「死の過程にある人」の看護をロイ適応看護理論を用いてその展開を掲載した。2021年は、「がん患者の死の受容、がん患者の終末期という時期についての文献検討、がん経験者における現在の治療の有無による苦痛の有無の調査結果を発表した。本研究の成果は、国内外学会発表6件、論文8本、書籍5件の公表である。2年間は感染対策のため緩和ケア施設での実証的はできなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1960 年代では終焉間近な患者にがんの告知をせず，家族に伝えるとする意見が趨勢であった。その後、Glaser&Strauss(1964)「死のアウエアネス理論」，キュブラ・ロス（1969）が、「死の受容過程」を提唱した。以後半世紀以上経過した現代において「死が間近な人の心理」に関する実証的調査に基づくモデルの提案はない。本研究では、「終末期とはどのような状態のときか」、日本人にとっての「死の過程の心理」について患者・看護師の双方より調査した。極めて死が近い時期の心理過程を明らかにすることができた。医療職者だけでなく自宅で看取り、看取られる人の心理的苦痛の理解の一助となった。

研究成果の概要（英文）：In 2018, we presented the results of our research on "Psychology of Cancer Patients Immediately before Death" at the international conference TNMC & WANS. In 2019, we presented our research results on "Contents and Timing of Complaints about Physical and Mental Distress in End of Life Cancer Patients" at a research exchange meeting. In 2020, we submitted a paper on "Psychology 16 Days before Death". The book published the development of "Nursing for People in the Process of Death" using Roy Adaptation Nursing Theory. In 2021, we conducted two literature reviews. They are "Acceptance of Death of Cancer Patients" and "The End of Life of Cancer Patients". In addition, the survey results were announced regarding "Presence or Absence of Distress Due to Current Treatment Status in Cancer Survivors." The results of this research are 6 presentations at domestic and overseas conferences, 8 papers, and 5 books.

研究分野：終焉間近な人の心理過程

キーワード：終末期　がん患者　心理過程

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1.研究開始当初の背景

（1）臨床で遭遇する困難性

死はその人やその家族にとって，死の過程における脅威な出来ごとである。特に，がんは，わが国 の死因の第 1 位を占めており，未だ不治の病という意識が根強い。こうした中，終末期にある患者の 看護において，患者が望む死への過程を支援できるかどうかが最大の課題である。終末期がん患者は， 身体的苦痛や，終末期にある患者は,「死を受け入れた」,「死への準備は整っている」と平穏な態度を とることは少なくない。しかしながら，死の直前に死をことさらに意識すると， これまで見せていた態度が一変し，怒り，苛立ち，憤り，無力などの行動を示す。完全治癒，社会復 帰をめざす医療の場においては,「死は忌避されるもの」であり（大島，2005），看護師もまた，患者 の「死にたい」という訴えや,「死」に関する話題を出されたときの対応に困難を感じている（小野寺,熊野ら 2013）。このような状況では，終末期がん患者の心理を把握できないため， 緩和ケアの客観的評価も困難な状況である。

（2）現在までの死の過程に関する理論と問題

死の過程に関する理論：国外では，1960 年代は，まだ終焉間近な患者にがんの告知をせず，家族など だけに伝えるべきとする意見が趨勢であった。しかし，Glaser&Strauss(1964)は，患者自身の死の認 識が，患者と医療スタッフ間の相互関係に大きく影響することに着目し,「死のアウエアネス理論」を提唱した。その後，Kübler-Ross（1969）が，終末期患者のインタビューを通して「死の受容過程」を モデル化している。この「死の受容過程モデル」を基盤にする Pattson(1977)，否定的な見解を示す Shneidman（1973），Buckman（1992）らの修正論が発表された。Corr(1991～1992)の問題解決や人生 の困難に適応していく能動的プロセスであるタスク理論，更に Copp(1997,2002)は死の適応過程の中で経験する拒絶と受容について報告している。 国内では，柏木(1980)が既告知患者と未告知の患者の受容過程の違いがあることに着眼し 5 段階説を 修正した。また，前田(2006)は,「死の受容過程」は，そのプロセスを移行する際にゲートが存在するとして，モデルを修正した。これらの理論は，Kübler-Ross（1969）の「死の受容過程理論」を基盤に した Kübler-Ross を支持する理論，Kübler-Ross の修正・発展型理論，Kübler-Ross とは異なった視点 からの理論に分類された（下舞，古川他：2015）。しかしながら，死の過程に関する理論は,a)半世紀前の医療情勢や社会環境の中で唱えられたものあるため，延命率の向上，告知やインフォームド・コン セントが一般化している現代との乖離がある，b)日本人の文化的背景が加味されていない，という問題点を抱えている。また，上述した点を踏まえた死に関する理論は今のところ構築されてない。そこで,まずは①終末期がん患者に関する文献レビューを行い、②終末期がん患者の心理を質的に分析し、仮説的概念モデルの構築を行った。

2.研究目的

（1）国内外の文献検討

緩和ケア病棟に勤務する看護師の面接調査と緩和ケア病棟の患者記録を通して，①文献レビュー、②終末期がん患者の心理を質的に分析し仮説的概念モデルの構築を行う。

3.研究の方法

（1）国内外の文献レビュー

①キーワード選定：海外論文は“death and dying” “terminal illness” “end-of-life” “palliative care” “psycho-oncology” “Japan” “Japanese” “research”を，邦論文は，“死”“終末期”“心理”“がん” “緩和ケア”をキーワードとした。国外投稿された日本人の文献，日本人を対象とした文献の見落としを防止するために，キーワードに“Japan”“Japanese”を，実証的論文を得るために“research”を加えた。

②データベース：国外論文は「PsychInfo」,「Web of Science」,「Medline」邦論文は「J-STAGE」「医学中央雑誌 Web 版」で行った。

③検索期間：年代制限はかけず，2019 年 12 月第 2 週目までの期間とした。

論文の質を担保するために Holly（2017）：Comprehensive Systematic Review for Advanced Practice Nursing.,p268 Figure10.3 を参考に論文スコア４ないし５点の文献を選択した。

(2) 終末期がん患者の心理を質的に分析し仮説的概念モデルの構築

①研究期間：　2016 年 12 月～2017 年 8 月の 8 カ月間

②分析方法：①「患者が死を自覚したと看護師が感じた時の患者の反応」「心理的変化のきっかけ」「心理的変化の時期」に関する文脈を抜粋し，②グランデットセオリー法を参考にカテゴリーの示す意味内容を確認しつつ仮概念モデルを生成した。

4.研究成果

（1）国内外の文献レビュー

①患者を対象にした研究：75 件中 59 件，患者と家族が 12 件，患者の診療録が９件，家族のみまたは介護者，患者と看護師が合わせて４件であった。死までの時期の表記が明確な文献は 75 件中 21 件で，６か月以内が６件で一番多く，次いで３～４カ月が４件，２年と１年未満が４件，他は死までの日数の中央値表記が５件，死まで７日と２週間の２件であった。この内縦断的研究では，“ 死まで ” という文献が５件含まれている。

終末期という時期の設定は各研究者で異なっており、また複数か月（6 カ月、3～4 か月）の対象は、死まで 6 か月の人もいれば数週間の人も対象となっており、死までの時期別心理過程は論文上では判断的なかった。したがって死が極めて近い人の心理の分析はわずか 2 件で週案付き看護や看取りの場での看護を示唆できるものはなかった。

②量的研究の独立変数と従属変数のカテゴリー化：独立変数は身体的変数が最も多く 36 文献（66.7%），次いで心理的なものが 35 文献（64.8%），スピリチュアルな変数のものが 21 文献（38%），社会的なものは 17 文献（31.5%），医療・治療に関する変数が 16 文献（29.6%）であった。この結果より心理過程に大きく影響している与えている変数は身体的変数であり、身体的な苦痛や緩和が心理に深く関係していることが示唆されていた。

（2）終末期がん患者の心理を質的に分析し仮説的概念モデルの構築

①対象：表１参照

②死までの身体的苦痛と心理的苦痛の推移：図 2 参照

③終末期のがん患者の心理過程の概念モデル：12 事例のコアカテゴリーは７であった。今回の 12 事例は全て【究極の身体的苦痛】が状況として あった。死を迎えるまでに 3 つのパターンがあっ た。パターン１は，3 事例で【究極の身体的苦痛】や【死の過程の暗澹】がありながら，同時につら くとも【死の受容】に至っていた。パターン 2 は， 2 事例で【究極の身体的苦痛】で苦しむが，意識 の消失を伴い今までの【身体的苦痛からの解放】 を得ていた。パターン 3 は，7 事例で【究極の身体 的苦痛】という状況で低下する日常生活活動や自 分がイメージした死の過程でないことや不確かな 死の過程の中で【死の過程の暗澹】を感じ，【自 己理想と現実の乖離】から，【死の不安】を感じ ていた。この 3 つのパターンをカテゴリー関連図 で図 3 に示す。

表１ 対象者一覧　　N＝12

No	データ記号	性別	年齢	原疾患	在院日数
Pt-1	A	男	40	消化器　膵臓がん	193
Pt-2	B	男	70	消化器　肝臓がん	80
Pt-3	C	女	60	消化器　肝臓がん	37
Pt-4	D	女	70	呼吸器　肺がん	68
Pt-5	E	男	60	消化器　膵臓がん	23
Pt-6	F	男	70	消化器　肝臓がん	26
Pt-7	G	男	60	消化器　胃がん	55
Pt-8	H	男	60	消化器　胃がん	21
Pt-9	I	男	70	消化器　大腸がん	20
Pt-10	J	女	70	消化器　胃がん	62
Pt-11	K	女	40	消化器　胃がん	38
Pt-12	L	男	60	皮膚がん	58

図2 死亡日までの身体的訴えの推移

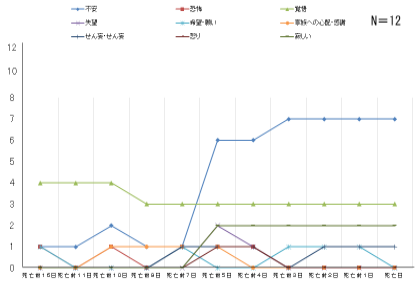

図３ 死亡までの心理的訴えの推移

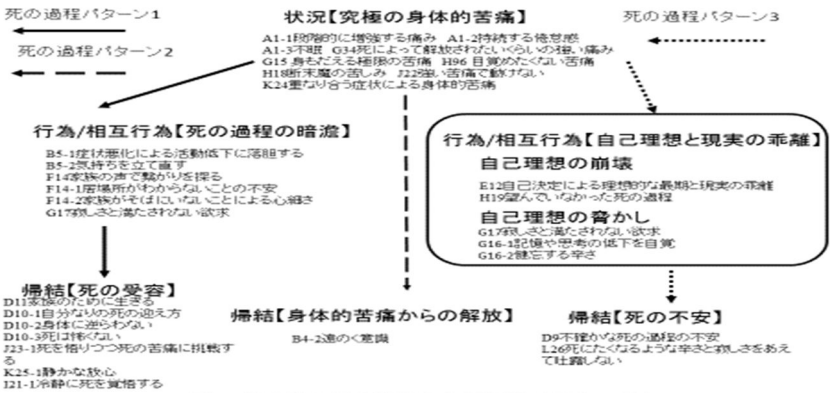

図４ 終末期のがん患者の心理過程の概念モデル

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　4件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 下舞紀美代	４．巻 12
２．論文標題 終末期のがん患者の死までの16日間の心理過程に関する探索的な研究	５．発行年 2020年
３．雑誌名 関西看護医療大学紀要	６．最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ikeda Yumie、Egawa Miho、Hiyoshi Kazuko、Ueno Tsukasa、Ueda Keita、Becker Carl B.、Takahashi Yoshimitsu、Nakayama Takeo、Mandai Masaki	４．巻 1
２．論文標題 Development of a Japanese Version of the Daily Record of Severity of Problems for Diagnosing Premenstrual Syndrome	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Women's Health Reports	６．最初と最後の頁 11～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1089/whr.2019.0004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 得丸定子、奥井一機、今井洋介、森田敬史、郷堀ヨセフ、カール・ベッカー	４．巻 91
２．論文標題 お経を聴くことの校歌とその可能性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『智山ジャーナル』	６．最初と最後の頁 14-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鎌田實、カール・ベッカー	４．巻 733
２．論文標題 輝く人生の「終い方」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『潮』	６．最初と最後の頁 176-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 下舞紀美代、加藤和生	4．巻 12
2．論文標題 終末期のがん患者の死までの16日間の心理過程に関する探索的な研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 関西看護大学紀要	6．最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Taniyama Yozo、Becker Carl、Takahashi Hara、Tokumaru Sadako、Suzuki Iwayumi、Okui Kazuki、Gohori Josef、Imai Yosuke、Morita Takafumi	4．巻 20
2．論文標題 Listening to Sutra-Chanting Reduces Bereavement Stress in Japan	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of Health Care Chaplaincy	6．最初と最後の頁 1～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/08854726.2019.1653637	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Ikeda Yumie、Egawa Miho、Hiyoshi Kazuko、Ueno Tsukasa、Ueda Keita、Becker Carl B.、Takahashi Yoshimitsu、Nakayama Takeo、Mandai Masaki	4．巻 1
2．論文標題 Development of a Japanese Version of the Daily Record of Severity of Problems for Diagnosing Premenstrual Syndrome	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Women's Health Reports	6．最初と最後の頁 11～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1089/whr.2019.0004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Hiyoshi-Taniguchi Kazuko、Becker Carl B.、Kinoshita Ayae	4．巻 41
2．論文標題 What Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia Affect Caregiver Burnout?	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Clinical Gerontologist	6．最初と最後の頁 249～254
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/07317115.2017.1398797	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Miki Ryusuke、Becker Carl B.、Ide Kazuki、Kawakami Koji	４．巻 79
２．論文標題 Timing and facilitation of advanced directives in Japan	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Archives of Gerontology and Geriatrics	６．最初と最後の頁 83～87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.archger.2018.08.003	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 カール・ベッカー
２．発表標題 「死別と霊性＝Grief Care」
３．学会等名 霊性研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 カール・ベッカー
２．発表標題 「Japanese Spiritual Practices Facing Elder Care & Bereavement」
３．学会等名 ADEC Conference（Pittsburgh PA）
４．発表年 2018年

１．発表者名 カール・ベッカー
２．発表標題 「看護に活かせる、いにしえの死生観」
３．学会等名 仏教看護ビハーラ学会（東大寺）
４．発表年 2018年

１．発表者名 カール・ベッカー
２．発表標題 「日本人とスピリチュアリティ」
３．学会等名 日本スピリチュアルケア学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 下舞紀美代
２．発表標題 終末期がん患者の身体的・心理的苦痛の訴えの内容とその時期
３．学会等名 第13回順心会・のじぎく福祉会　研究交流会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 下舞紀美代	４．発行年 2020年
２．出版社 日総研	５．総ページ数 179（138-161）
３．書名 重要なところだけ短時間で分かりやすく読む　看護理論	

１．著者名 Carl Becker	４．発行年 2019年
２．出版社 北京、机械工業出版社	５．総ページ数 107-137
３．書名 「倫理的使命」『与万物共生』稲盛和夫編	

1．著者名 カール・ベッカー	4．発行年 2019年
2．出版社 『仏教看護・ビハーラ』第14号　仏教看護　ビハーラ学会出版	5．総ページ数 16-28
3．書名 看護に活かせる日本人の死生観	

1．著者名 鎌田實、カール・ベッカー	4．発行年 2020年
2．出版社 『潮』733号　潮出版社	5．総ページ数 176-183
3．書名 輝く人生の「終い方」	

1．著者名 カール・ベッカー他.	4．発行年 2018年
2．出版社 自照社出版	5．総ページ数 96
3．書名 『仏教と医療の協力関係』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	加藤　和生 (Kato Kazuo) (00281759)	九州大学・人間環境学研究院・教授 (17102)	
研究分担者	古川　秀敏 (Hidetoshi Furukawa) (10316177)	関西看護医療大学・看護学部・教授 (34531)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	ＢＥＣＫＥＲ　ＣＡＲＬ．Ｂ (Becker Carl) (60243078)	京都大学・政策のための科学ユニット・研究員 (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
TNMC & WANS	2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関